

青年団公演 ハルカン動物園

1997年4月28日～5月1日 利賀新緑フェスティバル スタジオ
5月27日～6月24日 こまばアコラ劇場

キャスト

- 助教授 志賀廣太郎
- 戸塚 山村崇子
- 非常勤講師 山崎崇子
- 吉川 山村崇子
- 中村 平田陽子
- 奥寺 松田弘子
- 医学部の代表 山内健司
- 佐々岡 山内健司
- 研究員 兵藤公美
- 遠藤(生物) 和江理子
- 青木(医学) 足立誠
- 崎田(物理学) 永井秀樹
- 藤村(農学部) 安部聡子
- 安西(雲長類研究所) 天明留理子
- 上条(心理学) 天明留理子

スタッフ

- 作・演出 平田オリザ
- 美術 杉山至
- 装置 播磨愛子
- 照明 岩城保子・NEST・西本彩
- 宣伝美術 太田裕子・高橋京子
- 宣伝写真 橋口譲二
- ビデオ撮影 小口宏
- 制作 松尾洋一郎・赤列泰子

大学院生

- 大西(博士2年目) 秋山建一
- 澄川(博士1年目) 木崎友紀子
- 杉本(修士2年目) 辻美奈子
- 垣内(修士1年目) 川隅奈保子
- セールスマン 小此木
- 小此木 小河原康二
- 学生 保科 松井岡
- 浅岡 角館玲奈
- 木村 田村みずほ
- 事務員 楠田 山田秀香
- 外国の人 シエーキンス 志磨真実

あとがき

この「ハルカン動物園」は、一九九七年、「カガクするコロコロ」北限の猿に続く、科学シリーズ第三弾として上演された。初演は、利賀村の「スタジオ」と呼ばれる八角形の特異な劇場で、その空間を存分に生かした演出を試み高い評価を得た。この公演に先だつての利賀村での稽古は一ヶ月近くに及び、作品の完成度はかつてないものとなった。

その後、利賀から東京に戻って、引き続きアコラ劇場でのロングラン公演では、劇場付設のエレベーターを利用して、さらに立体的な演出を行った。

「おそらく、この「ハルカン動物園」は、私の「同時多発会話」の、一つの到達点を示す作品と言えるだろう。稽古場では、戯曲を三段組で表記していたものを、今回、出版にあたって二段組に組み替えたので、相当読みづらい印象があるかも知れないが、興味のある方は、紀伊國屋書店から発売されているビデオなどと併せてご覧いただければ幸いである。

さて、以下の二つの文章は、上演にあたってのチラシと、当日配布用のパンフレットに書き下ろしたものである。参考までに、ここに示しておく。

未来には夢も希望も絶望もない(チラシ用文章)

私の場合、一本の戯曲は、だいたい三年前くらいから構想を練りはじめる。構想の段階では、できるだけ流行と関係のない題材を選びたいと思っているのだが、出来上がってみると、そうとも限らないことが多い。

昨年は、私の十代の貧乏旅行を題材にした「冒険王」という作品を書いたのだが、その上演のあとに、例の「猿石ブーム」がきて、「危ないところだった」と胸をなで下ろしたものだ。

今回の「ハルカン動物園」は、脳の話である。これも、三年前から構想を練り、資料を集めていたものだが、昨年、「脳内革命」が大ヒットして、いささか困ったことになった。ちょっと恥ずかしく、「次は脳の話です」などと、おおっぴらには言えなくなってしまったのだ。

「脳内革命」はあくとしても、(実際、中身を読んでいないので、語る資格もないのだが)ここ数年の脳研究の発展は目をみはるものがある。専門家は、まだまだ脳の中身は判らないことだらけだと言っているが、それでも、この進歩の速度と、そして、おそらく幾度かの飛躍的大発見によって、二十一世紀中には、人間の脳の神秘の大半は、化けの皮がはがされてしまおうだろう。

心とは何かという大命題も、早晩、何らかの科学的根拠が与えられてしまおうだろう。芸術なんて、不必要な時代が来るかも知れない。いや、芸術とは、そもそも不必要なものだということが、はつきりする時代が来るだろう。私は、早く、そんな時代が来ればいいと思っている。夢も希望も絶望もない世界で、阿呆のように、あるいは何か祈るように演劇を続ける。それはとても楽しいことのような気がするし、そこには劇の可能性はないような気がしている。

1997年3月

混沌を明瞭に示す(当日パンフレット用文章)

同時多発会話の演劇を観る場合、いったいどの台詞を聞けばいいのかわかるということをよく聞かれる。私としてはただありのままを観て、聞いてもらえばいいのだが、観客としてはそうもいかないらしい。

「カクテルパーティー効果」という言葉がある。人間は、カクテルパーティーのざわめきの中でも、自分に関係のある会話の方に近づいてゆく能力があるという。逆に、これを「コンピュータ」にやらせようとすると、現在のコンピュータでは、なかなか難しい。

「コンピュータ」は、何か観るべきもの、何か聞くべきものを求めて、膨大な計算を繰り返す。だが人間は、何となく都合良く、自己に有益なものに近づいていく。

「どの台詞を聞けばいいのかわかる」は、だから私に聞かれても判らない。あなたはおそらく、都合良く私の演劇を観るだろうし、都合良く私の演劇に近づいていく。私はそれでいいように構わない。一番間違った見方は、作者(私)があなたに聞かせたい台詞があるのだと考えて、それを探り出すことに汲々することだろう。ここ「舞色」には、私があなたに伝えたい事柄や言葉があるわけではなく、私があなたに見せたい世界があるだけだからだ。

世界は混沌(カオス)である。私は、この混沌とした世界を判りやすく整理してあなたに伝えるのではなく、混沌のまま明瞭にあなたに示したい。数値化、言語化できる部分だけを抜き出して、あなたにそれを伝えるのではなく、数値化、言語化できずに不明瞭のままになっている部分を、演劇という手段を使って明瞭にすることで、あなたに直接示したい。

これが目下のところ、私が演劇に対して抱いている唯一最大の野心である。

1997年4月

なお、戯曲の中に記された「コラム」は、季刊「せりふの時代」(小学館)のために書き下ろしたものの一部である。特に自閉症に関する記述は、差別表現の問題を含む微妙な内容のため、編集部側と協議し、このコラムを併記することになった。今回の出版に当たっても、同様の措置をとりたいたいと考えた。